ISSN 1345-3580

Glocal Tenri

月刊 グローカル天理 Monthly Bulletin Vol.14 No.1 January 2013

天理大学 おやさと研究所 Oyasato Institute for the Study of Religion, Tenri University

1

CONTENTS

- 巻頭言
  情報の海を渡るために…
  ／深谷忠一 1
- 天理教海外伝道の資料（35）
  満州伝道関連史料⑲
  ／深川治道 2
- 天理教伝道史の諸相（13）
  愛知の天理教
  ／早田一郎 3
- 「おふでさき」の有機的展開（9）
  「おふでさき」第一号の構成と「せかい」
  ／深谷耕治 4
- フランスで育つ日本人の子供たちへの日本語教育（1）
  天理日仏文化協会こども日本語講座の取り組み
  ／田中久代 5
- 「いのち」をつなぐ―生死の現象（13）
  死をどのように考えてきたのか④
  ／堀内みどり 6
- ノーマライゼーションへの道程（11）
  障害当事者運動とまちづくり①
  ／八木三郎 7
- 平成24年度公開教学講座「信仰を生きる」：『逸話篇』に学ぶ（1）
  第7講：22「おふでさき御執筆」
  ／安井幹夫 8
- 図書紹介（72）
  『世界最悪の紛争「コンゴ」―平和以外に何でもある国―』
  ／森　洋明 9
- English Summary 10
- おやさと研究所ニュース 11
  第56回、第57回伝道研究会／第254回研究報告会／『グローカル天理』年間購読のご案内／『グローカル天理』合本のご案内／連載執筆のねらいと執筆者の紹介／平成24年度特別講座「教学と現代9」ご案内／平成25年度公開教学講座開催のお知らせ

巻頭言

情報の海を渡るために…

おやさと研究所長　深谷忠一　*Chuichi Fukaya*

謹　賀　新　年

皆様方には、つつがなく新年をお迎えになったことと拝察いたします。

さて、この巻頭言を書き連ねて3回目の正月を迎えましたが、昔ある先輩から聞かされた“ものを書くのは恥をかくことだ”との言葉が、年ごとに強く胸に響くようになっています。

天才でない凡人がものを書くには、その材料を種々インプットしなければなりませんが、今の大量情報社会の中では、常に“自分は今こう言ったが、他にもっと違う正しい情報があるのではないか…”という不安につきまとわれます。自らの不勉強さの言い訳だけでなく、良心的に考えれば考えるほど、確信的にものを言うのが憚れる世になっている。そこで何かを発信するには、恥をかいてもよい覚悟が必要になるのです。

たとえば、ある文芸評論家は、“1カ月に100冊の本を読む”と言っていますが、もしそれが可能であっても、その彼にして一生に読める本は7万冊に過ぎません。しかるに、昨今の日本の大型書店には、種々合わせれば150万冊の本が並んでいます。また、Google Booksというプロジェクトによれば、今現在世界には、1億2千986万4千880冊の本があると報告されています。つまり、一人の人間が一生かかっても、今日本で売られている本の1～2割、世界で発行されている本の千分の1しか読めないということなのです。

情報量ということでいえば、（情報の単位・求め方には議論の余地がありますが…）米国の南カリフォルニア大学のSuzanne Wu氏は、“現在世界には295エクサバイト（Exa Byte）の情報が蓄積されている”と言っています。（*e! Science News USC* 2011年2月10日）また、調査会社IDCのDigital Universe調査では、“2011年に作成または複製されたデジタル情報のデータ総量は、1.8ゼタバイト（Zetta byte）”だと報告されています。（1 Exa Byte=10億Mega Byte、1 Zeta byte=1,000Exa Byte）

世界の情報量を考慮する上でどちらを取るにしても実感の伴わない数値ですが、前者は、“銀河系の星の数に等しい情報量×世界の全人口”という数値であり、後者は“iPadで572億台分相当のデータ量―万里の長城を現在の2倍の高さで築くに足る台数”など説明されると、多少は視覚化できるでしょうか。

さて、それでは、このような状況下で、どうすればものを書き始められるのか、ということですが…、たとえば、今書いている“情報”に関しても、大量の情報学や情報工学に関する本や電子情報がありますから、それらの全てに目を通してから書くというのでは、何時までたっても何も書き出せません。ですから、ある程度の情報を得たところで“エイ、ヤーッ”と、恥をかく覚悟で踏ん切りをつけねばならないのです。

しかし、他方、その決断のタイミングを誤れば、自分が恥をかくだけでなく読者を惑わすことになります。ですから、何をどれだけインプットしてからなら発信できるのかを、しっかりと見極める力をもつことも必要になるのです。そして、その力をつける為に有効なのが、それぞれの分野でのいわゆる原典・古典といわれるものを読み込むことです。それで、発信することに関するものの見方・考え方の軸が定まり、言わんとする事柄の本質を外すことがなくなる。少なくとも、人を惑わす的外れなことは言わずにすむことになると思うのです。

その文脈でいえば、天理教者にとっては、「おふでさき」「みかぐらうた」「おさしづ」という原典をしっかりと読み込むことが大事になります。特に、「おさしづ」は7巻6,331頁の大部ですが、原典をつまみ読みして教理を説くのは大恥のもとになりますから、しっかりと読み込まねばなりません。

筆者の父は、生前、“「おさしづ」は、第一巻の始めから七巻の最後まで読み終えたら、次は、第七巻の最後から第一巻まで逆の順序で読めばよい”と申していました。筆者にはまだその逆さ読みができていませんので、それを何とか教祖130年祭までに実行したいものだと、今思案している次第です。